

## 東日本大震災医療支援終了の報告



副会長 玉城 信光

出口先生の電話から始まった。3月12日の朝、鹿児島出張の支度をして病院に着いたときに電話がなった。3月11日に発生した東日本大震災を受けて医療団の派遣をしましょうとの提案であった。阪神・淡路の医療支援を経験した先生の動きは速かった。宮城会長に電話をして、私は医療支援の為に沖縄に残り打ち合わせを始めた。

14日（月）の午後、15日に第1陣を派遣する事を決定し、班の編成、薬品や物資の調達、支援金寄付のお願いに取り掛かった。第1陣の出発から15陣まで79名の医療支援班の派遣を行った。支援金は1,400万円余に上った。多くの先生方の気持ちをのせて送り出された医療班は避難所の方々をはじめ岩手県の関係者から大変感謝され、5月31日に無事大槌町における医療支援を終了した。

医療支援の撤退をすることは難しい。現地

の担当者が決定すればその後にトラブルが発生したときの責任を問われることにもなる。しかし、これまで被災者に寄り添ってきた医療班がいきなり撤退することは被災者の不安を助長することにもなる。沖縄県の医療班は現地の開業医の先生方の開院、県立大槌病院の診療再開、各県の医療支援チームの状況をみながら、釜石の対策本部などとも調整し、5月31日をもって撤退することを決定した。撤退にあたり、まずは診療時間の短縮をおこなった。24時間避難所に寝泊まりをしていたのを、遠野市に宿泊を決め夜間の診療を中止した。沖縄県医師会撤退後の診療は日赤チームが巡回診療であることになり、城山体育館で診療した患者さんのカルテを日赤チームに引き継いだ。カルテは後日沖縄県医師会に戻される。カルテの解析をする中から、医療支援のあり方や今後の医療支援の必要事柄が生かされて



写真1. 岩手県医師会訪問：写真左より、千葉統括部長（岩手県医師会）、石川会長（岩手県医師会）、小生、上原事務局長（沖縄県医師会）



写真2. 岩手医師大学訪問：写真左より、鈴木医学部長、小川学長、小生、上原事務局長、小林病院院長、徳村係長（本会事務局）

して行政と一体となった事業として展開してきた。各医療班の報告にみられるように震災から日を重ねるごとに大槌の避難所や地域における生活状態が落ち着いてきた。5月27日の金曜日に沖縄県の医療支援の終了を報告するために、私と上原事務局長、徳村係長の3名で岩手県医師会、岩手医大、遠野市役所、大槌町役場、大槌病院仮設診療所、道又医院、釜石市対策本部を訪問しこれまでのお力添えに感謝し、これからは沖縄県医師会として支援していくことを約束してきた。(写真1～4) (沖縄県医師会のホームページ <http://www.okinawa.med.or.jp/> に詳細は掲載してある)



写真3. 釜石対策本部訪問：寺田本部長（写真右）。

写真6にみられるように瓦礫は大方片付けられてきたが、復興には今しばらくの時間が必要であろう。また大槌町臨時議会が開催され予算の審議も始まっているようである。学校が始まっているためか城山の避難所には小学生の姿はなく子供たちが元気に遊んでいて、ツツジの花も満開であった。大槌小学校は津波と火災で焼けこげているが、城山の避難所には鯉のぼりがあげられ元気を取り戻してきたのがわかる。(写真5)



写真4. 県立大槌病院仮設診療所全景



写真5. 避難所でなびく鯉のぼり。

いくであろう。

沖縄県医師会の医療支援は3月と4月はJMATとして日本医師会の派遣の形をとってきた。5月は沖縄県と調整の上、沖縄県の派遣と

避難所では多くの人々の集団生活があるが、仮設住宅ができ、避難所の集団生活から各家庭の生活に戻ったときに、少なくなった家族をみて気持ちの整理をもう一度しなければならないかもしれない思いを馳せた。そのときには再び心のケアなどが必要になるかもしれない。

このたびの医療支援活動では派遣された皆様から大変感謝された。沖縄県医師会が感謝しなければならないのだが、先生方、看護師の皆さん、事務の皆さんから大変感謝された。「貴重な経験をさせていただいてありがとうございました」とのことである。私たちの日常診療や各々の生き方に役に立つ大きな収穫があったと思われる。派遣を計画した私にも大きな収穫があった。個人的にもだが、県医師会事務局にとっても大きな収穫があったと思う。医師会事務局から女性も含め、のべ10名の職員が医療支援に参加してくれた。医療班への説明会、必要な物資の調達、関係機関への調整、空港での送り出し、迎えなど手分けしてたくさん仕事をこなし大いに勉強になった。そして何よりもこれまで自分の課を中心にしてきた仕事を超えて、みんなで協力してやらなければならないと結束力が強くなったと思う。困っている仕事を

手伝ってあげたり、知恵を出し合ったり、これからの医師会事務局の頼もしい姿を見ることができた。

この貴重な経験を5月31日で終わらすことはできない。派遣された皆さんの記録集を作りたいと考えている。写真を織り交ぜながら、支援に協力して頂いた皆さんにも役に立つものを作りたいと考えている。

また、沖縄で災害がおこったときにどのように対処するのか、貴重な経験をもとに沖縄県医師会として災害対策マニュアルを作成したいと考えている。もしものときに、各人は何ができるか、どのような指揮系統のもとで効果的な仕事ができるのか。多くの貴重な経験を残し沖縄県医師会の第1次医療支援が終了した。一緒に活動した同士としての絆をこれからも大切にしていきたいと思います。皆様、本当にありがとうございました。



写真6. 城山体育館から見渡す市街地：体育館周辺には色とりどりの花が咲いている。

## 沖縄県医師会災害救助医療班活動について (第4陣報告)



沖縄大学・オリブ山病院 山代 寛

### 4陣のメンバー

我々4陣は医師2名、看護師2名、事務職1名の計5名、4陣の先発で3月30日から4月5日まで、嶺井リハビリ病院の比屋根勉医師、フリーランスの長濱貴子看護師、3月31日から4月6日まで、私と真榮城克匡看護師（ハートライフ病院）、事務員として天久台病院の精神保健福祉士 裊地敬さんというメンバーで派遣された。

比屋根先生は、AMDAのメンバーとして2001年エルサルバドル大地震や2006年津波後のインドネシアでの医療活動に従事した経験もあり、4陣のリーダーとしてふさわしい、頼もしい方。長濱さんは比屋根先生の信頼あつく、オーストラリアの看護師免許も持つスーパーナース。真榮城君はやはりケニアや中越地震後の被災地での活動経験のある、熱い心を持った好青年。裊地君は宮古市出身で心のケアにあたればと願って志願した（残念ながら大槌では事務作業で手一杯となりもったいなかったが）まじめな青年。そしてなぜか私というなかなか面白い顔ぶれだった。

### 医療班参加に至るまで

3月11日、久留米でおこなわれた禁煙の講演会に講師としてお招きいただいていたため、地震や津波はちょうど機中での出来事だった。福岡空港についたのが5時前、空港は何か騒然とした雰囲気だった。テレビ局にインタビューされていた人に尋ねて、東北で大きな地震があったことを知った。その方は仙台に行く飛行機が欠航になり、津波と火事で家が心配と言っていたが、大きな地震があったんだなあとなり

ながら、講演会の会場にむかった。珍しく満員だった講演会が終わってホテルでテレビを見て唖然とした。鳥取日赤に外科医として勤務する弟からDMATで福島に出発したという電話が入ってきた。岩手県の宮古市にすむ妹一家とは連絡が取れない。翌週、スペインに出張予定だったが、それどころではないとキャンセルのメールを送った。

沖縄に3年前にやってくるまで外科医として、岡山県にある災害拠点病院のリーダーとして、災害に備え年二回、県の訓練に参加、あるいは企画し、立川の災害医療センターで災害拠点病院の研修をうけたという経歴を生かしたいと、岡山時代から親しい県DMAT、南部医療センターの林峰栄先生に電話したところ、私の実力をよく知る先生からは、せっかくだからスペインにいったらよかろうと、役に立たないと遠回しに言われ心が折れそうになった。しかし、くじけず沖縄県に「派遣するなら貴重な沖縄県の医療資源をもちだすよりどうか余っている私のような人間を用いて下さい。足手まといにならぬようできるだけ県のために被災者のために働きたい所存です」とメールしたところ、医師会の医療班に参加するという返信をいただき、禁煙講演会でご縁のできたとよみ生協病院の高嶺朝広先生から3月16日の県医師会の会合に来るよう連絡を受けた。その会合で第4陣派遣がきまったことをtwitterでつぶやいたのだが、そのつぶやきをみて全く予想もしていないところからメールがやってきた。琉大時代から親しくしていたオーストラリアで医師をしている山内肇君からだった。彼も被災地で医療活動をしたいというので高嶺先生に連絡す

るよう返信した。

**大槌での医療活動**

3月31日、第3陣の大湾さんの迎いのレンタカーに荷物を積み込み花巻空港から大槌に向かった（写真①）。



写真①

道中ガソリンスタンドは普通に営業しており、また釜石も津波の被害に遭っていないところは全く被災地には見えなかった。しかし釜石駅あたりから津波の爪痕が明らかになるにつれ、車中は重い空気になった。テレビで見ていた風景をいざ目前にすると言葉を失った。前日から小槌川にかかる橋の手前の信号機が復活したということだったが、避難所につくとNTTの移動基地局が設置されていて普通に携帯電話が通じ、試しに持っていったPocket WiFiもつながった。出口先生からレクチャーを受けていた災害用のトイレも水洗便所が復活したため使わずにすんだし、申し送りにあったような電力が不安定になることも経験せず、避難所においてライフラインは大方復旧していた。

第3陣の申し送りでは、避難所は落ち着いており感染症もないということだったが、2週間我慢していて悪化した外傷、デブリ、縫合処置を要する人、片付け中の外傷、釘踏み抜き症、犬咬傷など、破傷風トキソイドが必要な方も結構いるということだった。釜石で破傷風が2例みられたということで、3週目になっても外科医のニーズがあり役に立てそうだと思った。実

際のところはそれほど外科医の活躍する場面はなかったが、仕事をしている証拠写真を患者さんの承諾の元撮らせていただいた（写真②）。



写真②

4月1日から保健師さんたちの人事異動、調剤薬局の開設、地元の開業医の道又先生の参入などめまぐるしく状況が変化していた。道又先生とは親しく交わることができ、元気をいただいた。医院再建が町の復興のシンボルになるようにとがんばろうと、同じく被災し落ち込んでおられた地元の開業医、藤丸先生を励ます姿に胸を打たれた。4月3日からは山内肇医師が、また北上で開業されている小児科の平野先生、藤丸先生も毎日ではないが診療に加わることになり、4診まである充実した陣容となった（写真③）。



写真③ 左から斐地、嘉数、山内、真栄城、長浜、比屋根、饒波、道又、山代

**避難所の変化**

避難所は最初のうちは申し送りの通り、落ち着いている印象だったが、花粉症が激増すると

ともに、内外の dust により呼吸器症状を訴える人が増えて夜中に咳き込む人が増えてきた。栄養も炭水化物に偏っており、タンパク質やビタミン摂取が不十分で栄養状態が悪化してきているようだった。運動も十分でなく、しかもほかの避難所の閉鎖により今後人数が増えていくことが予想されたので（結局そうはならなかったが270名から300人増の600人近くという情報があり）感染症やDVT、廃用萎縮などの患者さんが増えることに危機感を抱いた。3陣までは3日に2件程度の搬送だったが、4陣からは、肺炎、敗血症、高度脱水を伴う尿路感染症、転倒による骨折などなど、連日の複数回の救急搬送で、避難民の不安も増していることを耳にした。

保健師からも震災後3週間を過ぎ弱ってきている人が増えていると報告があり、われわれも夜に避難所を回診し、状態の悪い人、気になる人を保健師との間でダブルチェックをはじめた（写真④）。



写真④

（一ヶ月後、沖縄大学の学生を連れて避難所を再訪したが、このとき搬送した患者さんたちが皆お元気だと確認でき安堵した。しかし避難所の状況が大きく好転しているようには思えず今後を心配している。）

寒さ、余震、栄養不足、運動不足、花粉、粉塵、避難所でたまるストレスから逃れるために沖縄県への一時避難をおすすめしたいと思っていたが、沖縄県は本気で1、2ヶ月の移住を支援しているということであったため、玉城先生

の指示により比屋根先生とともに町災害対策本部をたずね沖縄県が被災者を受け入れる用意があること、医療班がそのためにお役に立ちたいということをお伝えした。様々なハードルがあり、集団での疎開は実現しなかったが、仮設住宅の早期移住の見通しが立っていない今も沖縄疎開のニーズはなくなっていないと個人的には思っている。

#### 大槌から帰ってきて

4月6日、あっという間に1週間がたち、気になることをそのままに大槌を去ることになった。ご挨拶がてら、大槌の現状を直接お伝えしたいと、釜石の対策本部を訪ねた。お忙しい中、本部長の寺田先生にわざわざ見送っていただいた（写真⑤）。妹一家とも会うことができた。



写真⑤ 左から山内、真榮城、山代、寺田災害対策本部長、婁地

4月7日、真榮城君と二人沖縄に帰ってきた。しみじみと帰る家があつてよかったと思った。そういえば古巣の岡山のチームはどうしているのかなと、メールをしてみた。ちょうど大槌でわれわれが医療活動していた時期に、岡山県派遣第5陣医療班として大船渡で医療救護活動を行っていたらしく、人的余裕のない病院なのにがんばってるんだなあとうれしく思った。自分も家族を始め多くの人の支えで人生を変えるような貴重な体験をすることができた。この経験を生かし長く被災地の復興にかかわっていきたいと思っている。最後になりましたが稿を終えるにあたりこのような機会を与えていただき、お支えいただいた医師会、関係者の皆様に御礼申し上げます。

## 大槌町の復旧を願って (第5陣報告)

県医師会医療支援第5陣 介護老人保健施設陽光館 饒波 保



東日本大震災から3週間を経た4月3日、岩手県大槌町の医療支援のために沖縄を発った。花巻空港から陸路で遠野、釜石を通過して目的地である大槌町に向かった。道路脇や周囲の山々には雪が残り、朝夕の気温は2、3度、時には雪の舞う寒い時期であった。



大槌町を目の前にした釜石の市街に着くといきなり異様な光景が飛び込んできた。

つい3週間前には人びとが生活していた家は、あってはならない所にあり、中は瓦礫で埋まっていた。この世の出来事ではない、夢でも見ているようでただ唾然とするばかりであった

リアス式の三陸海岸は入り江に流れ込む川に沿って集落が並び周囲は急斜面な山である。津波は防波堤を破壊して家が密集した港に近い町を襲ったあと川を登り、堤防を越え、津波到達予想地点をはるかに超えた奥地まで呑み込んでいた。津波に呑み込まれたところには何ひとつ原型をとどめて残ったものはなかった。

目的地の大槌町は災害対策会議中の津波で町長をはじめ役場職員を失っていた。津波に呑み込まれた地域を見下ろす高台に大槌城址があり

その途中の公民館に県医師会仮設診療所が開設されていた。

被災から3週間が過ぎ、避難所の方々は不便な環境、ゆきわたらない救援物資、咳をするにも周囲を気にする状況に、次第に疲労とストレスのため、食欲がなくなり点滴を希望する人が増えていた。そんな中、仮診療所の若いスタッフたちは、どこから手に入れてきたのか、帽子掛けを利用して点滴スタンドを作っていた。

仮診療所では訪れる患者のほかに保健師からの依頼を受けて1日に数件の往診を行っていた。



私が往診した80歳の男性は、震災前は要介護2で屋内を壁伝いに歩行していたとのことであったが往診したときにはすでに寝たきりで四肢は拘縮が始まっており、奥さんの介助で食事をし、仙骨部には浅い褥瘡が出来ていた。

津波で2人の息子を失ったという老夫婦は「1日中避難所にいて、座ったり横になったりしている。」との情報であった。「明るいうちは出来るだけ避難所の外に出て散歩や運動で体を動かして下さい。」と声をかけた。次の日の朝、老夫婦は避難所を出て、私と短い朝の挨拶を交わした



あと、公園のベンチに腰を掛けた。後で気づいたが、おばあさんはベンチに腰を掛け市街地の方を向いていたがおじいさんはおばあさんと向き合って立ったまま、街を見ようとはしなかった。そして、数分後には再び避難所に戻って来た。「もうお帰りですか。」と話しかけると、「(瓦礫に埋もれた) 街は見たくない。」とポツリと言っていた。息子を呑み込んだ津波が残した瓦礫に埋まった街を直視できないでいたのである。

避難所だけではなく在宅で、医療の目の届かないところにはこのようなたくさんの災害弱者がおられると思われる。お年寄りが一度失った機能を再び獲得するのは容易なことではない。いわゆる“生活不活発病”対策の重要性が増してくると思われる。



城山公園の東斜面の墓地に建立された仏像は地震で倒壊することなく「復旧の一部始終を見ておこう。」とでもお思いなのか、瓦礫と化した大槌市街を見下ろしていた。

東北の各地では毎年3月3日には大掛かりな避

難訓練があり、今年も訓練をしたばかりだった。避難所で暮らす人に聞いた話で「津波の時には、川に沿って逃げるのではなく川に垂直に山に上れ、決して後ろを見るな、他の人のことはたとえ身内でも考えないで“てんでこ(てんでばらばら)に逃げる」という鉄則があるらしい。そんなことを言っていた彼も「自分は逃げるときに、うつ伏せになってもがいているおばあさんを助けようとした。しかしおばあさんはそのまま津波に呑み込まれてしまった。顔が見えなかったのがせめてもの救い。」とも言っていた。

公園の斜面に小さな祠があり、七福神が祭ってあった。祠の周囲は地震で崩れ、火災で黒焦げになっていたが、七福神はしっかりと鎮座しており、写真に収めたあと、1日も早い復旧を祈って私も手を合わせた。



大槌町では全国から集まってきたいろんなボランティア団体が活動していた。災害対策本部に全国各地から寄せられた励ましの言葉。手紙がいっぱい詰まったダンボールの山を整理する





## 震災地を訪ねて (第6陣報告)



北部病院 高江洲 信孝

医療支援という大義名分を背負って、町長以下多くの町職員を失い、自治の麻痺した町、大槌町へ花巻空港から3時間かけて4月10日夕刻到着した。戦後生まれの私にとって第二次世界大戦はもちろん朝鮮戦争さえ知らず、ベトナム戦争は遙か彼方の記憶の中に眠ったままで、戦場の様子は、映画や記録フィルム、小説等々で想像するしかすべはないが、被災現場が目飛び込んできた瞬間、私の想像する戦場が目の前の光景と一致した。快晴と思われる町の空気は淀み、粉じんや花粉と入り混じって霞がかかったようで途端に目が痒く咳込む、その先に、テレビや新聞で繰り返し見せつけられた風景が姿を現した。まさに爆弾が投下され、瓦礫の山となった戦場そのものを思わせる町、目が痒み霞んで見えた光景は、淀んだ空気のせいだけではなく、私自身の涙の影響もあったのだと理解できた。

避難所となっている大槌町中央公民館へと一歩足を踏み入れた瞬間から、私自身被災者となったような錯覚に陥った。空気のような存在でしかなかった日常生活スイッチを押せば明か

りがともり、蛇口をひねれば水が出、トイレへ入れれば水が流してくれるー3月11日14時46分まではそうであったのだ、我々と同じように。公民館の中は、避難所特有の臭気に覆われ、生気を失い、希望を失い、そして家族を失った人々が、ただただ狭い空間を何する当てもなくトイレと与えられた僅かな空間を移動し、座り横になりレトルト食品を口にする、ある種絶望感や寂寥感は漂いながらも、何となく違和感を感じずにいられなかったのは(変な言い方だが)病人と思しき人達をあまり見うけなかったせいだったのだろうか。

当日は遅くに到着したため、一通り明日からの仕事内容についてのブリーフィングを受けた後、我々もレトルト食品にて夕食を済ませた後、寝袋にくるまって就寝についたのだが、余震と寒さのため寝つけずに、まんじりと朝を迎えることとなった。さっそく8時頃から診療を開始したところ、昨日抱いた違和感の原因に気付くことになった。沖縄を出発する前、私の脳裏にはあの阪神淡路大震災の時の医療スタッフの仕事の内容を想像していたからだ。崩れ落ちた建物や転倒による外傷、火事による火傷、水不足による透析患者の治療の遅れ、といったあらゆる疾患に対応を求められるものと覚悟していた、しかしながら現実には、マスコミ報道通り被災地では、Dead or Alive (死者行方不明者か存在者)の世界で、生存者は特に外傷もなくADLもほぼ自立しているようにみうけられたからなのである。私が現地入りしたのは一カ月後なのだが、第一陣で現地入りした先輩Drに聞いてもやはり同様であったのだと。実際診療を開始してみても、ほとんどの患者さんが感



冒、粉じんや花粉による鼻炎や咳の悪化、ストレス性胃炎による下痢、慢性疾患の悪化、さらには、避難所生活が長引くことによる不眠、うつ状態等の疾患が大半を占めていた。



朝から診療を開始し、夕方には釜石市の災害対策本部へと片道一時間かけて瓦礫と化した町中を通り、その日の患者数や救急搬送患者の状態報告、避難所からの要望等を報告に行くのだが、その車窓からみる風景はまさに地獄絵図のごとく、震災当日は阿鼻叫喚の様相を呈していたものと想像はしてみるも、その情景はなかなか実像として頭の中で描くことができなかつた。が、しかしながら診療も一段落したころ、一緒に仕事をする保健婦や看護師、そして地元Dr（彼女、及び彼らも又被災者である）達と雑談をする中で、その生々しい体験談を聞くにつれ、その恐ろしさたるや、如何ほどのものであったのか……おぼろげながらその輪郭が垣間見えたような気がしてきた。ある保健婦さんは、瓦礫とともに流されながら幸運にも、一緒に流されていた家屋の屋根につかまり救助されるまでの一夜を明かしたという。腕が痺れ、まどろむ意識の中で、ややもすると手を離しこのまま流されて死を選んだ方がどれだけ楽だろうと思い、自分の首から吊るしていたネームプレートを折りたたみポケットにしまう、遺体となって発見された時に自分だと識別してもらえないように。道又先生、地元住民に愛され、大槌駅のすぐ目前で内科小児科医院を標榜し、まさに町医者をしていくような還暦手前のDr、津波

により二階建ての医院兼住宅は破壊され、本人を含め家族五人ともに、患者さんを帰したあとで自宅二階へと避難し、じわじわとせり上がってくる水の恐怖と対峙しわずか30cmの隙間で呼吸をし難を逃れたという。すべてを失い失意のどん底にいながら毎日我々とともに寝起きし笑顔で診察にあたる、一人一人に声をかけ励ましながら。何だろうか？彼らをそのような行動に駆り立てるのは。使命感？ヒューマニズム？それとも東北魂か、持って生まれた性格なのか、わたしには理解できなかつた。人は実際に当事者になってみないと本当の意味での悲哀、苦悩、懊悩はわからないと思う、死刑廃止を声高に訴える人々が、自分の身内が当事者になってみないとどのような思想の変化を表すかわからないように。避難所で暮らす人々や患者さんと接し、毎日のように“頑張ってるね”“気落ちせず前を向いて行こうね”なんてかける言葉の何と陳腐なことか、所詮我々は一週間もすれば家に帰り又普通の日常生活に戻り、遙か遠く沖縄の地から被災地をマスコミを通じて見聞き涙し、彼らの気持ちを慮り、募金箱を見れば募金をする、それしか出来ないのだ。



今こそ国家のリーダーが超法規的決断をし、まず被災者の生活を一刻も早く救済正常化し、全世界の英知を結集して原発の終息をはかることを最優先課題として取り組んで欲しい（これは日本一国の問題ではないのだ）、Kenedy大統領の名言—祖国があなたに何をしてくれるのかを尋ねてはなりません、あなたが祖国のために

何をできるかを考えてほしいーしかし今は違う、日本国民は何もできないのだ祖国のために。国家が考えてほしい、国民のため何ができるのかを。

陛下が被災地を訪れになられた時、人々の表情ににじみ出る安心感、畏敬の念（現職の総理大臣とは大違いである）、日頃平和ボケした日本人は、平時においては現職大臣に暴力装置と呼ばれ、不倶戴天のごとく猜疑心を向けられる自衛隊の献身的な活動、又、震災翌日には、病院船とも呼ばれる強襲揚陸艦エセックスや空母を宮城県沖に向かわせていち早く救助体制をとった我が国最大の同盟国アメリカ、さらには、仮説の診療所を作り100種類もの医療機器を残し帰国したイスラエル等々いずれも平時のさいには様々な問題を抱え非難の対象となる人々の努力が被災者住民を支え、危険を承知の上で瓦礫の撤去や遺体の収容、行方不明者の捜索、自衛隊医官による巡回診療と、どれだけの貢献をしたか、地元マスメディアはあまりこのような事実を伝えない。おそらく基地問題とリンクされるのをきらってのことであろう。しかし、それはそれとして私は純粋に感謝したい（確かに3月11日以前に問題となっていたメア日本部長による侮蔑的な発言をぼかし、海兵隊の沖縄での存在価値を、日米同盟の強固さをみせつけるためのPerformanceでは？といった意見があるのだが）。中国、ロシア、北朝鮮と不安定な

東アジアにおいて、本当の有事の際に我々日本人を守ってくれるのは自衛隊でありアメリカではないのか、これを機会に復旧復興と同時に国防についても大いに議論を始めてもいいのではないだろうか。

今回の被災地への医療支援を通じて、私自身日本人であることを誇りに思った。あれ程のダメージを心身ともに受けながらも避難所では、泣き叫ぶ人も居ず、炊き出しのさいには整然と列をつくり、我先にと割り込む人もいない、外国での災害シーンでみる人々の行動とは雲泥の差である。

大槌町を離れる日の朝、気温も上がって空は澄み渡り、春の訪れを感じさせる天気であったが、予報ではまた冷え込み、雪の可能性もあるという。避難所の高台からみる町の風景は全く震災直後と何ら変わらず、所々自衛隊や警察車両が行き来し、瓦礫の山から何かを捜す人々の姿が散見される。一方で、一転山の方へ眼をやると、梅の花が咲き始め、山桜が、その蕾を大きく膨らませて、いまにも弾け開花を迎えそうな気配である。まさか自分自身が生きている間にこれ程の未曾有の天災人災がおこるとは思いもよらなかったし、自然の脅威はテレビの中だけの世界であった。桜が満開になる頃、少しでも復興へ向け人々の心が癒され、前向きな気持ちになってくれることを祈りつつ、自治の失われた町、大槌を後にした。

